

1 神聖な水

【生命の源】

人間は水無しで生きていくことができません。日々生きていく糧^{かて}である食事についても、その調理のほとんどに水が必要です。私たちのエネルギーの源である食糧の素材となる農産物、穀類や野菜、肉、魚なども、水無くしては得られないのです。すべての生命の源に水があると言っても、過言ではありません。

一方、調理や暖房などに不可欠な火は、水をかけて消すことができます。水はその対極にあるともいえる、火や熱をも制御できる不思議な力を持つのです。ですから、火山の山頂に



乗鞍岳の火口湖（権現池）

ある火口湖は特別神聖な場所とわれてきました（こうした点については、拙著『天下凶事と水色変色—池の水が血に染まる時—』、高志書院、2007年、を参照していただきたい）。

ところが、この大切な水も地球温暖化による環境変化によって、大きな危機に瀕しようとしています。ユネスコによる旱魃^{かんぼつ}地域予測によれば、2025年、もう20年もせずに、地球上は多くの地が、旱魃に見舞われるようになるとのことです。しかもその結果は、人間だけに影響があるわけではありません。全地球が危険にさらされてい

ます。二酸化炭素排出など人間がしでかした行為によって、全地球の生命に危険が及ぼうとしているのです。

【宗教儀礼と水】

このような特別な力を有する水に対して、日本人は特別な気持ちを抱き続けてきました。そのことがよくわかるのは、宗教行事における水の役割においてです。

「^{みそぎ}禊」という言葉がありますが、これは「身に罪または穢（けが）れがあるとき、また、重要な神事などの前に、川原などで、水で身を洗い清め穢れを落とすこと」（『日本国語大辞典』第2版、小学館、2001年）です。皆さんの多くが神社に参拝する時、手を洗い、口をすすぐことは、これにつながります。

となると、水は穢れなどを洗い流してくれる、特別な能力を持つことになります。洗濯をするのに水を使うのだから当たり前じゃないかと思うかもしれませんが、穢れは目に見えないものです。目に



諏訪大社上社本宮の手洗い場

見えない人間の身についた罪や穢れという、形のないものを水は洗い流してくれると日本人は信じてきたのです。

そのような水に対する意識は古くからのものでした。『魏志倭人伝』(中国の魏の

史書「魏志」の「東夷」の条に収められている、日本古代史に関する最古の史料。－新村出編『広辞苑』第5版、岩波書店、1998年－）に、倭人は十余日の服喪の後に「挙家水中に詣りて澡浴し、以て鍊沐の如くす」（石原道博編訳『新訂 魏志倭人伝 他三篇』46頁、岩波文庫、1997年）とあります。3世紀に倭人は、人が亡くなると服喪した後に、沐浴して穢れを除いていたのですが、この行為が中国の人の目には奇異に映ったのでしょうか。死の穢れを水で洗い流すことは、禊ぎに通じます。

記紀神話においては、イザナキノミコトが黄泉国から帰った際に禊をしています（『日本古典文学大系1 古事記祝詞』69頁、岩波書店、1981年。『日本古典文学大系67 日本書紀上』94頁、岩波書店、1970年）。この世では穢れを祓わなくてはいけないのですが、とりわけ神や仏など、他界のものと接触するには禊が必要でした。

このような、身を清めてから、神仏に近づくべきだとの発想は、現代でも水垢離や千垢離（こり【垢離】神仏に祈願するため、冷水を浴び身体のがれを去って清浄に



柱松神事の前の禊ぎ（飯山市）

すること。水垢離。－『広辞苑』－）という形で残っています。

祭りに際して、浜辺に出て潮水を浴びる浜降りという行為も、水

の聖性に由来するものでしょう。潮水を汲んでその水で神社や神体などを清める、潮汲みの習俗も各地に伝わっています。その流れの中に、祭りで水や海水を掛け合う風習があるのです。

「笹水」はケガレを取り除こうと塩水や湯を笹竹で振りかけることです。正月元旦に汲む「若水」には、人を若返らせたり邪気を払ったりする力があると信じられてきました。死に水も、本来は衰弱した靈魂に新たな息吹を吹き込むもので、若水と同じ役割を期待してのことでした（折口信夫「若水の話」、『折口信夫全集』第2巻、中公文庫、1975年）。水の力は絶大だと信じられたのです。

奈良東大寺の二月堂で、3月1日（元は旧暦2月1日）から14日

間行われるお水取りの香水は、若狭国（福井県）から送られてくるとされ、この水を戴くと諸々の病疫を退散させることができると信じられてきました。

私は学生たちに、一生に一度、せっかく信州に来たのだから是非見ておいた方が良いでしょう、長野県飯田市（旧南信濃村、上村）で行われる霜月祭りしもつきを見に行くことを勧めます。冬の夜を徹して行われる実に感動的なお祭りです。これと良く似た祭りに、天龍村坂部



遠山郷の霜月祭り（飯田市）

の冬祭りや愛知県の南設楽郡で行われる花祭りがあります。こうした祭りは湯立て神事と呼ばれるものです。霜月祭りの場合、山々の木々が葉を落とし、すべてのものが元気をなくしたときに、再び魂を活性化させ、増殖させようとして、煮えたぎる湯の周りで神事をします。姥と呼ばれる面をつけた者が、笹を持って周囲をたたき、場合によると笹に湯をつけてたたきます。そのクライマックスでは、水王、土王といった神の面をつけた者が素手で沸き立つお湯に手を突っ込み、周囲にその湯を飛ばします（『遠山まつり（写真 信濃風土記3）』、長野県教育委員会、1956年』。こうした湯を浴びることによって、人々は清浄になり、魂が増殖するのでしょう。

日本では古くから一揆いっきが行われてきました。その作法である一味いちみ神水しんすいは、人々が一致団結するために行う儀式ですが、起請文に署名し、それを焼いて灰にし、神に供えた水（神水）に混ぜて全員で飲みます。こうして、誓いは身も心も一体となって、神を媒介にして成立するのです（勝俣鎮夫『一揆』、岩波新書、1982年）。水は神と人間をつなぐ手段でもあるのです。

このように日本人にとって水は、穢れをも清めることができる、あるいは弱った魂を強めることができるなど、特別な能力を持つと意識されてきました。



祭に準備された水と杉の葉
（松本市）